



株式会社 アルコ・イーエックス

代表取締役 こ た ぶ ん じ 木田 文二氏

■企業概要

本 社：茨城県ひたちなか市津田東4-10-5

創 業：平成2年5月10日

従 業 員：77名

事業内容：ソフトウェアの設計・開発、
ハードウェアの設計

ひたちなか市に本社を置く株式会社アルコ・イーエックスは、平成2年に創業し、ソフトウェアの設計・開発とハードウェアの設計を主な事業としています。

宮崎県出身の木田社長は、大学の研究室で初めてコンピューターに触れてから「この機械を使って、社会にある様々なモノを動かしてみたい」という夢を持ったそうです。

その後、遠く茨城にある日立製作所の水戸工場で鉄道制御システムの設計開発に携わり、平成2年に有限会社アルコを創業、平成9年に株式会社化し、社名をアルコ・イーエックスとしました。

同社は「ソフトとハードの両面から社会貢献できるサービスと製品づくりを目指すソリューション企業」として、日々、先進的で永続的な努力をし続けています。

(インタビュー日：平成29年4月13日)

〔聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一〕

ご自身の略歴と御社創業のきっかけについてお聞かせください。

■「コンピューターで社会を動かしたい」

私は宮崎県都城市の出身です。都城市は鹿児島県と隣接し、室町時代から江戸時代まで島津氏が治めていた歴史ある町です。

故郷を離れてから約30年が経ち、改めて自分が生まれた町を振り返ると、自慢できる場所がたくさんあると感じています。

県内の高校を卒業後、私は福岡大の理学部応用物理学科に入学しました。大学の研究室で初めてコンピューターに触れてから「この機械を使って、社会にある様々なモノを動かしてみたい」という夢を持つようになりました。

■ 鉄道制御システムの設計開発に携わる

大学卒業後、私は九州から遠く茨城にある日立製作所の水戸工場へ派遣社員として赴任し、鉄道関係の車両部に配属されました。

業務内容は、鉄道を時刻表通りに動かす運行管理システムの設計開発です。このシステムは大量のダイヤをデータベース化し、ラッシュ時など過密状態下でも時間通りに電車を動かす高い性能が求められます。

当時、私を含め同期の社員は、この開発に関する専門知識を持ち合わせていなかったため、共に励まし合いながら技術を高め、大変な苦勞をしながら業務を遂行していきました。

しかし派遣社員だった私は、どんなに働いても時間給でしか成果が出せず、これでは会社への貢献にならないと考えました。私はこの状況をなんとか打破したいと思い立ち、入社から8年経った時、会社にある提案を投げかけました。

■ 派遣社員から、個人事業主へ

「日立製作所の職場に勤務しながら、請負（ひと山いくら）の仕事が発注してほしい」—これが私の提案でした。会社は渋々ではありましたが、この提案を受け入れ、さらには部下も付けてくれました。

その後、昼間は今までと変わらず日立の職場で働き、夜間や休日は約500万円で自費購入した高性能コンピューター「ワークステーション」を使い、仕事の能率を上げるためのシステム開発に没頭する日々を過ごしました。

私は会社の売り上げに貢献しましたが、会社は今まで通りの安全な派遣体制を望んだため、遂に退職を決意しました。

しかし、請負で仕事を出してくれていた日立側からは「まだ任せたい仕事如山ほどある」と伝えられ、これからも仕事を続けることを要望されました。

そこで私は、独立してそれまでの仕事を継続することに決め、平成2年に有限会社アルコを創業しました。

社名に込められた想いをお聞かせください。

■ 社会に「いいモノ」を提供したい

鉄道制御システムの設計で培った「正確」「安全」「緻密」「厳格」「責任」の精神は、当社の全ての基本となっています。

当社のモノ作りは「常に人の役に立ち、喜ばれる『いいモノ』を作りたい」という強い想いが根底にあり、この想いが当社のブランドを作り上げています。

当社は平成9年に株式会社化し、「Advanced and Lasting Company that is EXquisite in every respect」の頭文字を取って、社名を「ALCO_EX(アルコ・イーエックス)」と改称しました。

社名には、「先進的で永続的な努力をし続けることで、お客様に提供するサービスや製品があらゆる点でご満足いただけることを目指す」という決意を込めています。

御社の事業概要についてお聞かせください。

■ お客様の声が開発のヒントに

当社の業務は、制御系、通信系、Web・IT関連、業務支援系、汎用系、クラウドアプリケーションなど「ソフトウェアの設計・開発」と3DCADと3Dプリンターによる「ハードウェアの設計」です。

当社が開発したタブレット型「来訪者受付システム」は、何度も当社を訪れる方から「受付を簡略化できないか」という声に発想を得て開発しました。プライバシーマークなどに準拠しており、インシデント発生時は来訪者の検証も可能です。



「来訪者受付システム」で来訪記録を記入することで、社内の受付業務も軽減できる

■ クラウド型の生産管理システムを開発

その後、上記のシステムを搭載したタブレットが新聞に掲載されました。すると、記事を読んだという銚田市にある企業の会長様から、受付システムを生産管理システムに応用できないかという相談を受けました。

同社は農家から仕入れた野菜をカットする加工工場でした。それまで、その工場では仕入れや加工の状況などをホワイトボードに手書きし、夕方にエクセルで集計していました。

会長様はホワイトボードの代わりにタブレット入力すれば作業効率が上がるのでは、と記事からインスピレーションを受けたそうです。会長様のその発想力には、感服するばかりです。

現在、銚田・新潟の各工場では当社が開発したクラウド型の生産管理システムにより、加工と生産の状況をリアルタイムで把握することができます。



これまでの歴史を語る木田社長

御社の転機についてお聞かせください。

■ セオリーを破り、全社員を派遣

創業以来、当社の主な事業は日立製作所からの請負業務でしたが、平成20年のリーマンショック以降は発注金額が減額し、経営は窮地に追い込まれてしまいました。

私はこれ以上の業務委託は不可能と判断し、同社に委託契約解除の意向を伝えたところ、代わりに当社社員の派遣依頼を提示されました。

経営のセオリーとして、社員を派遣する場合は最低5%の人員は残すべきだといわれています。しかし、窮地に追い込まれていた私は、このセオリーを破り、全社員を派遣する決断を下しました。

■ 窮地が新たな扉を開く

社員不在の社内は閑散とし、新入社員は仕事を覚えることができません。私は、彼らに自分の得意分野を高めるよう指示しました。すると新入社員は、HP作成や電子看板「デジタルサイネージ」など新たな分野に挑戦していききました。

これは当社にとって新しい動きでした。今まではシステム開発の受注が当社の主軸だったため、他分野の開拓には目が向かなかったのです。

しかし、私は経営のセオリーを破ってまで全社員を派遣し、会社も私自身もまっさらな状態になったことで、以前から挑戦してみたかったITやIoTを活用した自社製品の開発に踏み出す意欲が湧いて来たのです。

知的財産権を活用した御社の新商品についてお聞かせください。

■ 開放特許「患者見守り技術」との出会い

ある日突然、富士通株式会社と筑波銀行が来社し、富士通が所有する開放特許の説明と特許を活用した新製品開発の相談を受けました。

当社は当時「顔認証技術」を探しており、その件について相談してみましたが、特許の開放はできないとの返答だったため、この時点では特段の進展はありませんでした。

その後、富士通から再度連絡を受け、汐留本社に訪問すると「患者見守り技術に係る特許」を利用した新製品の開発相談を受けました。話を聞いた私は「これは可能性がある」と直感し、帰りの電車の中、夢中で構成図を書き上げました。

■ 自社製品「Patient Watcher」を発売

構想から約1年、遂に今年4月25日に富士通の開放特許を活用した自社製品「Patient Watcher」ベシエント ウォッチャーの販売を開始することができました。

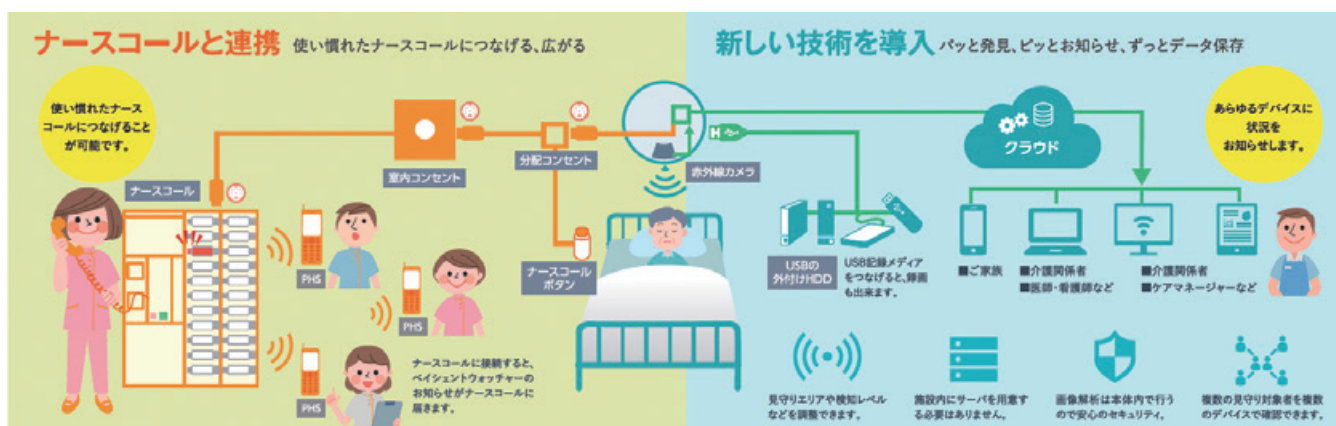
「Patient Watcher」は、赤外線カメラを搭載しており、ベッドの周囲約2mの様子を撮影することができます。

また、撮影した情報は数値化されクラウド上に蓄積され、介護・看護現場の省力化に利用することが可能です。

開発の様子は「ガイアの夜明け」でも取り上げられ、お客様からは「いつ販売するのか」など多数の問合せをいただきました。



「Patient Watcher」がベッドから起き上がる患者に反応し、システムが作動する様子を説明する木田社長



「Patient Watcher」はナースコールと連携しているため、医療介護従事者の負担を抑えることができる

■「医療介護の新しい未来」を提案

5年前、当社の企業理念に「Ethical Solution Company」を加えました。私は理念に掲げる「社会に貢献できるソリューション企業」の実現を目指し、試行錯誤の日々を過ごしてきました。

ナースコールと連動した「Patient Watcher」は、効率のかつ迅速な介助サービスを実現し、さらに職員の負担軽減にも寄与する製品です。

少子高齢化が進む日本は、少ない人口で多くの高齢者を見守る必要があります。当社の「Patient Watcher」は単なる見守りシステムではありません。これは、医療介護の新しい未来のカタチなのです。

社員に対する想いと今後の事業展開についてお聞かせください。

■ 社会貢献できるソリューションを

私は派遣した全社員に「皆さんの賞与を2倍にする」と約束しており、そのためにも収益を上げる必要があります。また、ソフトウェア会社は人員さえいれば商品を開発できる身軽さがありますが、私は目に見えないシステムというものに対し、以前から物足りなさを感じていました。

だからこそ私は、委託業務ではなく、リターン率が高くて目に見える製品の開発に乗り出したのです。これからも当社はソフトとハードの両面から社会貢献できるソリューション企業として、一層の努力をして参ります。

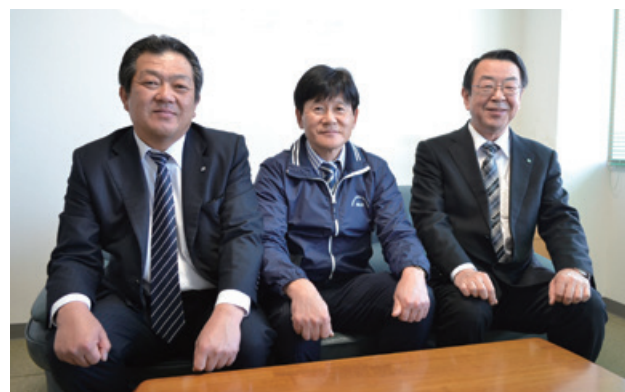
最後に、木田社長が考える起業家のあるべき姿をお聞かせください。

■ 安定を求めず、常に進み続ける

起業家は安定を求めてはいけません。なぜなら、人間は楽な場所に身を置くと消極的になり、本来果たすべき役割を全うできなくなるからです。

私は常に今のままでは出来そうにない約束をして自分を窮地に追い込み、解決に向けて悩んで努力することで、成長することができると信じています。「窮すれば変ず、変ずれば通ず」です。

企業は社会のポンプであり、利益を集めて社会に再分配する義務があります。これからも新たな事業に果敢に挑戦し続け、社員とともに社会貢献できるサービスや製品を提供して参ります。



木田社長(中央)
水戸営業部 原部長(左)と聞き手・藤咲耕一

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。

■ 文責・写真：筑波総研株式会社 研究員 富山かなえ